

修士論文要旨

百年戦争期フランスにおける親王の地方統治

地域文化リノベーションプログラム

学籍番号 g 0220005

氏名 中野敦揮

今回の修士論文で私は、百年戦争期（1339～1435）の親王（国王と血縁関係のある諸侯）の地方統治についての研究を行った。

百年戦争期のフランス王国内には、王の権力に伏さない諸侯およびその所領（諸侯国）が多数存在していたが、百年戦争終結後には、そうした諸侯国のほとんどが王領に併合された。しかし、百年戦争期の諸侯国に存在していた様々な在地勢力の影響力は近世にはいってもなお健在であった。加えて、諸侯国時代に整備された統治組織や裁判組織等もまた近世に入っても受け継がれていた。

諸侯国が王権によって吸収されたにも関わらず、なぜ諸侯国の制度や在地の勢力が百年戦争後も生き残り続けたのか。私は、修士論文において、百年戦争期に諸侯国の君主として種々の地方統治業務に深くかかわっていた親王の地方統治の実態について、加えて親王の統治活動が後世のフランスにどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしつつ、この課題について論じた。

なお、私があえて親王に焦点を当てて研究を行ったのは、親王以外の諸侯の統治活動の記録があまり残存していなかったためである。

本論文は3章から構成されているが、まず第1章では親王への諸侯国授与の慣習の変化が親王の地方統治活動にどのような影響を及ぼしたのかについて研究した。

親王が統治した諸侯国のことを一般的に『親王国』というが、当時のフランスにおける諸侯国の大半は『親王国』であった。親王は、土着の勢力であった一般の諸侯とは違い、王から王領の一部を与えられる形で初めて、領国を持つことが出来た。すなわち親王国は、王が王位を継承する長子以外の王子（親王）たちに王領の一部を封土として分け与えることによって形成された諸侯国である。そして、親王国は基本的にはその王子（親王）たちの男系男子の子孫によって継承されていった。

王が王子（親王）たちに王領の一部を分け与えるというこの親王国授与の慣習は、百年戦争勃発以前と以後では、その意義が大きく異なっている。

私は百年戦争勃発以前と以後の親王国授与の慣習の意義の違いについて、親王国設定文書の内容を参考にしつつ考察した。なお親王国設定文書とは、王が親王たちに親王国を授与する際に発行した証書のことである。この親王国設定文書には、親王国授与の目的や親王に授与される土地の詳細、親王国授与に伴ってどのような権限が与えられるのかといったことが記されている。

百年戦争以前の設定文書の内容のほとんどは授与される土地といった相続財についてのことであった。加えて王領の相続に関して王位を継ぐ長子とその兄弟の間で争いが起こるのを未然に防ぐために親王国の授与が行われたと記されている。

一方、百年戦争勃発後の設定文書においては、親王は王の統治を支えるべき存在であるといったことが述べられている。加えて親王国授与に伴って、領地などの相続財のみならず、国王裁判権や王税を徴税する権利など、これまで王が独占的に保持してきた王権が親王に委譲されることが明記されている。加えて、分与される王領の規模が百年戦争以前に比べて格段に大きくなっている。

以上の設定文書の内容から、百年戦争以前は親王国授与が親王同士の内紛を防ぐという家門的な利害のために行われたということがわかる。一方で、百年戦争以降、親王は親王国授与に伴い、戦火に揺れるフランス王国の安定化に寄与するため、王の手足となって親王国を十分に統治することを求められるようになったことがわかる。百年戦争以降、与えられる親王国の規模が増えたこと、加えて設定文書の中で王の統治を支えるべき人々のあるべき姿が記されるようになったこと、王権の一部が親王に授与されるようになったことがその証左となる。

第2章では、ここまで述べてきたような親王国の慣習の変化が、親王の地方統治にどのような影響を及ぼしたのかについて、フランス王国における有力な地方勢力であった都市に焦点を当てて述べていった。

都市は12世紀ごろに領主であった司教権力を退けて自治権を獲得し、それ以降は王権に対して独自の立場を保つようになった。しかし百年戦争期に入ると、都市はイギリス軍や自国の傭兵による略奪などで経済的に大きなダメージを負い、混乱した。

親王国の授与とともに、王国統治の安定化に寄与するため親王国をよりよく統治していく事を求められるようになった親王たちは、親王国の円滑な支配のためにも地方の有力勢力であった都市の治安を安定化させる必要があった。

親王は都市が抱えていた問題について、都市と「対話」を重ねつつ解決していった。実際に、親王は自ら都市に赴き、都市の諸身分と議論したうえで、イギリス軍や傭兵を討伐するための援助金を都市から徴収するなどしていた。

第3章では、親王国の慣習の在り方の変化が、親王と親王国内の中小貴族との関係にどのような影響を及ぼしたのかについて述べていった。

中小貴族は、都市と同様に王権や親王に服さない有力な地方勢力の一つであった。親王は親王国の円滑な支配のためにも在地の有力者であった中小貴族との良好な関係の構築を試みた。

親王は都市の場合と同様に、百年戦争による戦禍など様々な不安を抱えた中小貴族と議論を重ねた。そして親王は時として中小貴族の要望を認めるなど、彼らの利害を尊重していく形で協力関係を構築していった。

この修士論文を通じて、百年戦争以降、親王は親王国授与とともに戦火に揺れるフランス王国の安定化に寄与するため、王の手足となって親王国を十分に統治することを求められるようになったことが明らかとなった。そして、親王たちが統治に際して、都市や中小貴族といった親王国内の諸権力との「対話」を重視していたということも分かった。

このような親王の統治の在り方が、貴族や都市といった地方勢力が百年戦争の被害を受けながらも地方における影響力を残し、百年戦争終結後も王権に対して独自の利害を主張していくことができた要因となったと言える。

そして、こうした「対話」をもとに地方統治を行っていくという親王の姿勢は後世のフランス王国の統治にも生かされていくこととなる。実際、百年戦争終結後、王国諸身分が参加する、課税協議のための会議が開かれるようになった。

百年戦争期に親王が行った「対話」による統治は、在地の有力者が地方における影響力を残していくことができた要因となったと言える。そして、こうした「対話」による統治の在り方は、百年戦争が終結した後のフランス社会にも受け継がれていったのである。